

## 漢字テストのレベル別評価項目

### KANJI TESTING ITEMS FOR DIFFERENT LEVELS OF LEARNERS

加納 千恵子、筑波大学  
 Chieko Kano., University of Tsukuba  
 kanochie@intersec.tsukuba.ac.jp

**概要：**WEB上で受験可能な初級漢字語彙処理能力測定テストを開発した。このテストを、多様化する学習者に使用可能なマルチ・レベル対応の適応型システムに進化させるために、学習者の日本語レベル、既習漢字数などによる評価項目の検討を行った。入門期、初級前期、初級後期、中級前期、中級後期、上級に分けてテスト問題を作成し、各レベルにおける困難点などを検討した。例えば入門期では、字形の識別、字形構造の認知、漢字の意味理解にも困難を覚える非漢字圏学習者が存在するが、レベルが上がるにつれ比較的早い時期にそれらの困難点は解消される。しかし、漢字1字の音読みの処理や漢字語彙の文中での用法、品詞性や共起性に関する処理能力などは、レベルが上がっても依然として習得が困難であることがわかった。

**キーワード：**漢字テスト、評価項目、漢字語彙処理能力、字形識別、音読み処理

#### 1. はじめに

表語文字である漢字は、「形・音・義」という3つの情報に加えて言葉としての「用法」の情報をも担っており、わかりやすく示すと、図1のようになる。アルファベットのような表音文字の場合は、字形と音すなわち読みが対応しているだけで、そこに意味は介在しない。したがって、原則として1文字だけで意味を表すことはなく、いくつかの文字が連なった「綴り」になってはじめて言葉としての意味を持つが、漢字の場合は、ある字形が読みを表すと同時に、言葉としての意味も表す。そして、その言葉が文中でどのように使われるかという「用法」をも一緒に覚えないと使えるようにならないのである。

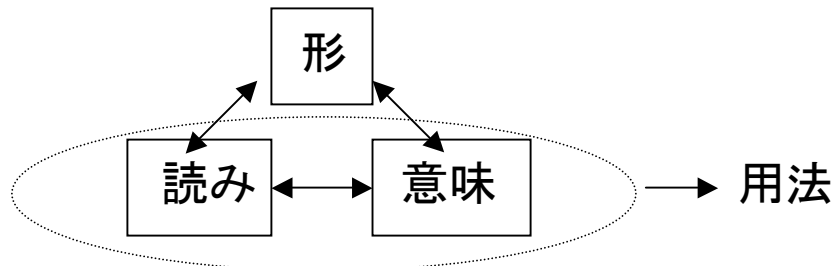


図1. 漢字の情報

従来の漢字の読み書きテストは、これらの情報の連合がトータルに達成されているかどうかをみる総合的全体評価 (holistic) であり、初級の非漢字圏の学習者にとっては、努力がなかなか

か結果に反映されず、学習動機を削ぐ結果になることが多かった。そこで、加納・他（2002）、加納・酒井（2003）および加納（2004）では、これらの漢字に関わる情報の処理がどこまでできているかをみる分析的評価（analytic）として、初級漢字語彙処理能力測定テストを提案し、開発した。

## 2. 漢字語彙処理能力測定テスト

この初級漢字語彙処理能力測定テスト（以下、「漢字テスト」と略す）は、図2のように現在WEB上で受験可能な形になっており、筑波大学留学生センターの日本語能力測定システムの中に置かれている。

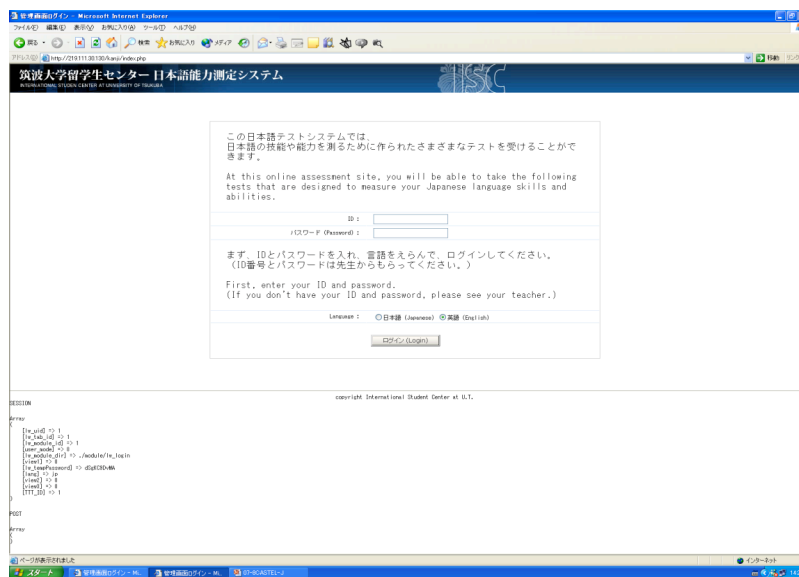


図2. 筑波大学留学生センター日本語能力測定システム

この漢字テストは以下の14の評価項目からなっており、各項目に問題10問、合計140問で構成されている。

1. 漢字の英語による意味処理をみる問題
2. 対義字による意味理解をみる問題
3. 漢字語の読み処理をみる問題
4. 字単位の音読み処理をみる問題
5. 漢字語の書き処理をみる問題
6. 構成要素による書き処理をみる問題
7. 漢字の音声による処理をみる問題
8. 漢字語の音声による意味処理をみる問題
9. 動詞・形容詞の漢字の活用による送り仮名処理をみる問題
10. 漢字語の品詞による用法処理をみる問題

11. 漢字語の文法的共起性による用法処理をみる問題
12. 漢字語の文脈（意味的連語知識）による用法処理をみる問題
13. 漢字の字形識別力をみる問題
14. 漢字の字形の構造認識力をみる問題

加納・他（2002）では、このテストを紙の形で筑波大学留学生センターの学生 38 名（100 字程度の漢字を学習した入門期の学習者および 200～300 字程度を学習した初級前期の学習者）と、米国カリフォルニア大学サンディエゴ校の学生 33 名（入門期の学習者から初級後期の学習者、1,000 字程度を学習した中級の学習者、2,000 字程度を学習した上級の学習者まで）に試行した結果を報告しているが、次のようなことがわかった。

- (1) 字形識別力をみる問題や字形構造認識力をみる問題は、非漢字圏の入門期の学習者には困難を覚える者がいるが、それ以上のレベルでは困難は解消される。
- (2) 意味処理をみる問題は、漢字圏学習者には容易な問題であるが、英語による意味処理問題に比べて、対義字による意味理解をみる問題の方が難度が高い。
- (3) 漢字語彙の文中での用法、品詞性や共起性に関する問題の結果には、学習者の日本語レベル（語彙力、文法力）との相関が見られる。
- (4) 漢字 1 字の音読みの処理問題は、たとえ既習漢字であっても、日本語のレベルがかなり上でも、依然として困難である。

### 3. レベル別漢字テストの評価項目の検討

加納・他（1993）には、初級後期を終わって中級に入る学習者（400～500 字程度の漢字既習）のための診断的評価として開発された「漢字力診断テスト」がある。その評価項目は以下のとおりである。

- A. 対義字による意味理解をみる問題
- B. 漢字熟語の意味の語構成の理解をみる問題
- C. 漢字の構成要素の認識をみる問題
- D. 語単位の漢字の書き処理をみる問題
- E. 文脈による漢字語の書き処理をみる問題
- F. 漢字語の品詞による用法処理をみる問題
- G. 動詞・形容詞の漢字の活用による送り仮名処理をみる問題
- H. 漢字語の文脈による読み処理をみる問題
- I. 語単位の漢字の読み処理をみる問題
- J. 同音字の音読み処理をみる問題
- K. 漢字の意味、字形、品詞、音読みによるグルーピング認識をみる問題

A、B のような意味処理の問題は、初級後期の漢字圏学習者には易しすぎる問題であるが、非漢字圏学習者にとっては、表語文字である漢字の意味理解がどこまで進んでいるかをみるために有効な問題となっている。このテストでは、H・I の読み問題と D・E の書き問題が記述式であるため、他がかなりできていた漢字圏学習者でも読みが不正確な者が多かったり、品詞

などの用法処理が母語の影響でずれていたりするのに対して、非漢字圏学習者の場合は、文法力や語彙力があっても、やはり書きが苦手という結果が出ている。これは両者が混じって学習している補講漢字クラスにおいては、互いのできるところと苦手なところを再認識し、協力して学び合うための有効なフィードバックを提供している。また、このテストを受験した初級後期から中級の学習者すべてに共通しているのは、Jの同音字の音読み処理をみる問題やKの問題の中で特に音読みのグルーピング認識をみる問題が難しいということである。

このような結果が、上級（漢字 1500 字程度の既習）になるとどのように変わるのかを見るため、筑波大学留学生センターの補講上級漢字クラスでは、加納・他（2001）の各課の事前テストとして「力だめし」という問題を課しているが、読みだけでなく品詞情報の確認も行っている。漢字圏、非漢字圏を問わず、上級においては、音読みよりもむしろ訓読み語の方が難しいという結果が出ており、また、品詞情報についても難度が高い項目となっている。

#### 4. おわりに

漢字のような情報量の多い文字や語彙を長時間かけて学習する際には、総合的評価と同時に、形成的評価としての分析的評価が不可欠であると考えられる。初級においては、テストの WEB 化により受験者データをさらに増やし、評価項目の妥当性を検討していきたい。また、中上級レベルにおいても、紙のテストで得られた結果をもとに問題の WEB 化を図り、レベルに応じた評価項目の検討を進めて、多様化する学習者に使用可能なマルチ・レベル対応の適応型漢字テストシステムに進化させるための準備を整えたい。

#### 参考文献

- 加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子・阿久津智『Intermediate Kanji Book 漢字 1000PLUS』Vol. 1, 凡人社, 1993
- 加納千恵子「中上級学習者に対する漢字語彙教育の方法」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』15号, pp. 35-46, 2000
- 加納千恵子・酒井たか子・小野正樹・當作靖彦「漢字処理能力測定テストの試み」『国際会議 CASTEL/J2002 PROCEEDINGS』カリフォルニア大学サンディエゴ校, pp. 143-146, 2002
- 加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子・阿久津智・平形裕紀子『Intermediate Kanji Book 漢字 1000PLUS』Vol. 2, 凡人社, 2001
- 加納千恵子・酒井たか子「漢字処理能力測定テストの開発」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』18号, pp. 59-80, 2003
- 加納千恵子『非漢字圏学習者の漢字語彙力測定のための標準テストの開発』平成 12-15 年度日本学術振興会科学研究費補助金による基盤研究(B)(2)研究成果報告書(課題番号: 12480059), pp. 1-130, 2004.